

エッセイ

やじ馬昆虫撮影記

(その1 飛ぶ昆虫を狙う)

千葉大学大学院 准教授

野村 昌史 (のむら まさし)

昆虫の大きな特徴として、「翅を持って飛翔できる」ことがあげられる。現在地球上で約100万種が記載されている昆虫の中でも、翅を有する昆虫の占める割合は高い。なかには生活環境に適応した結果、翅を失った(退化した)昆虫も多く見られるが、生活圏を3次元に広げることができる「飛翔」は、昆虫が生き残っていくうえでも大きな役割を果たしているに違いない。

野外に出て華麗に飛び回るチョウを見れば、その瞬間を撮りたいと思うものの、当たり前だが簡単には撮影できない。野外で飛翔している昆虫を撮影するには、①飛んでいる昆虫を静止させるため、明るい場所で高速でシャッターを切る、②複眼はもちろん、多くの部位にピントが合っている、③正面とか真横から等、その昆虫の全体像がわかるように撮影することが必要、と私は(勝手に)思っている。となると、そんなよい条件に恵まれることは極めて少ないので、当然満足できる写真はほとんどない。ヒラタアブ類はホバリングして撮りやすいので入門にお勧めだが、素早く飛ぶヤンマ類やアゲハチョウ等は、よほど運がよくないと撮影できないだろう・・・しかし、いつもは敏捷な昆虫でも、雌雄の出会いではゆっくり飛んでくれることがある。

ある夏の日に大学の研究棟の屋上緑化で、昆虫を観察しているときであった。この日はガマズミについてのサンゴジュハムシを数えていたが、ふと見上げるとウスバキトンボが目の前でホバリングしているではないか。急いでカメラを取り出して近づくが、あまり逃げないので60ミリのレンズで撮影することができた。1箇所にとどまりつつも位置は細かく変わるので、位置取りに苦労はしたものの、真横からの撮影ができた(図-1)。その後もホバリングしているので辺りを見ると近くの木

枝にもう1匹がとまっていた。腹部の形状からどうもこの個体はメスらしい。そして飛んでいるのはオスであった。彼らは屋上まで上がってきて、メスが休止したのでオスが自分の存在をアピールしているようであった。そこでメスも一緒に写し込んだ写真を撮ろうと、メスの方向へ動いたところ、この動きは彼らにはよくなかったようで、どちらも飛び去ってしまった。そして彼らの恋路を邪魔しつつもオスの飛翔を切り取った写真が残った。

飛ぶ昆虫と言えばチョウであるが、彼らもメスが吸蜜し、その周りをオスがせわしく飛んでいるのを見ることもある。でもそれより比較的頻繁に観察できる雌雄の追尾行動を撮影したいと思っていた。しかし観察する機会はあっても自分の周りですずと追いかけてくれないので、望遠レンズが欠かせないが、重くてあまり持ち歩かないからチャンスを逃してばかりである。

でも夏休みの圃場で、コムシジがゆったりと長い時間追いかけてくれたとき、やはり望遠レンズは持っていなかったが、撮影することができた。飛翔は遅かったり速かったり、さらには突然舞い上がったりと、やはりシャッターチャンスは少ない。しかし小さいながらも夏の日射しに浮かび上がる雌雄の写真を手にすることができた(図-2)。ほかのチョウでも追尾個体は多く見るものの、まだ満足する写真は得られていない。

私は自分にないものを持っている人に惹かれるようだ。楽器が弾けないので演奏している人に憧れるし、芸術家やデザイナーの作品を見て感心することが多い。そして昆虫を被写体にする写真についても、自分が持っていない能力である「飛び立つ瞬間や飛翔中の個体」を狙っている。これは私の上昇志向の表れなのか、それとも逃避願望なのか・・・定かではない。



図-1 飛翔するウスバキトンボ



図-2 コムシジの追尾飛行

NEWS

農薬に関するリスクコミュニケーションを開催

消費者庁、農林水産省など

消費者庁、内閣府食品安全委員会、農林水産省などは11月9日、埼玉県さいたま市の産業文化センターで、「食品に関するリスクコミュニケーション—知ろう、考えよう、農薬のこと—」を開催した。基調講演は、独立行政法人大学入試センターの山本廣基理事長が「農薬はどうして必要？」をテーマに講演。農薬が登録されるまでに行われる広範な安全性試験を詳しく述べるとともに、農薬の安全性や必要性に関して分かりやすく解説した。



消費者などと活発な質疑応答が交わされた

行政からは、農林水産省消費・安全局の楠川雅史課長補佐が、「農薬が使用できるようになるまで～農薬登録と使用者への指導～」、厚生労働省医薬・生活衛生局生活衛生・食品安全部基準審査課の小川雄大基準策定専門官が「食品衛生法における農薬の残留基準について」、内閣府食品安全委員会事務局評価一課の堀部敦子課長補佐が「食品安全委員会における農薬の食品健康影響評価について」と題して講演。パネルディスカッションは、一般社団法人 FOOD COMMUNICATION COMPASS の森田満樹事務局長をファシリテーターに、講演者に加え、茨城県農業総合センター園芸研究所の富田恭範研究調整官、生活協同組合コープみらいの齋藤尚子組合員理事の登壇を得て、活発な質疑応答が交わされた。

安全協・第38回全国集会、特別講演会を開催

海運ビルで、全国農薬協同組合（全農薬）

全国農薬協同組合（会長：青木邦夫・東海物産会長）は11月18日、都内千代田区海運ビル・海運クラブホールで全国農薬安全指導者協議会（安全協）の第38回全国集会を開催した。

全国集会では、平成27年度の事業報告・収支決算、

秋季フィールドデーを開催—埼玉・神川農場で、朝日工業

朝日工業（本社・東京都豊島区、村上政徳社長）は11月4日から6日までの3日間、同社の神川農場（埼玉県児玉郡神川町）で、秋季フィールドデーを開催。会期中、農家や農協関係者など延べ約300名が見学を訪れた。

神川農場は2013年春に開設、同社の育種研究の拠点として、主力品種である耐病性の大玉トマト、ミトマトをはじめ、カボチャ、キュウリなど十数種類の果菜類、葉菜類の育種に取り組んでいる。パイプハウス10棟、大型ハウス5棟、圃場などを合わせて、総面積は3.1ha。見学コースでは、同社が取り扱っている肥料や農業資材などを出品した展示ハウスに加え、抑制トマト、抑制キュウリ・メロン、立ち作りカボチャのハウス、プロッコリー、ハウレンソウ・コマツナ・ニンジン、ダイズなどの露地圃場が公開された。

トマトコーナーでは、同社の主力品種のひとつである黄化葉巻病耐病性の大玉トマト「アニモTY-10（中早生種）」、「同TY-12（早生種）」のほか、上市を間近かにひかえた抑制・促成栽培向け品種の「AMS-014」、促成栽培向けの「同-017」、抑制栽培向けの「同-015」などについて、見学者から耐病性や収量、食味、日持ち性などの質問が相次いだ。同社は、種苗メーカーとしては後発となるが、耐病性品種の育種で強みを発揮し、順調にシェアを拡大している。採取地は中国やインドなどであり、生物工学研究所種苗開発担当の内館雅晴氏は「収穫・採種しても病害菌が検出されれば、日本への輸入はいいさできない。栽培中の病害虫管理には、特に注意をはらっている」と語った。耐病性品種の開発力を強みとする同社は、常に新たな病害を見据えた育種にも取り組んでいるという。



多数の見学者が訪れた秋季フィールドデー

NEWS

平成 28 年度の事業計画・収支予算を承認。安全協の北海道、青森県、神奈川県の各担当者が農業シンポジウムの実施状況などを報告した。

特別講演は、東京大学名誉教授で公益社団法人食の安全・安心財団の唐木英明理事長が「化学物質の安全性と消費者の不安」と題して講演。農業の安全性や必要性に関して、身近な例を引用しながら詳述した。



農業の安全性や必要性をテーマに特別講演

「第 60 回虫供養」法要を開催

農業工業会

農業工業会（会長平田典・日産化学工業専務）は

11 月 20 日、東京台東区の浅草寺で恒例の虫供養法要を執り行った。農作物保護のために防除された害虫を供養するため、毎年のこの時期に開催しており、第 60 回を迎える今年も、平田会長をはじめ植物防疫関係者が約 80 人が出席し晩秋の夕暮れ、しめやかに合掌した。

法要後、浅草寺にほど近い、おはし de 精養軒で開催された「集い」の冒頭、平田会長は、「JCPA VISION 2025」の実現に向けた計画推進を述べる中で、とくに「足元の会員をはじめ、農家・流通、アカデミアに対する啓発活動に力を注いでいきたい」などとあいさつ。午後 5 時 30 分過ぎ、和やかな歓談のうちに散会した。



農業工業会と植物防疫の関係者がしめやかに合掌

茨城・中央研究所、秋の見学会を開催ーシンジェンタジャパン

シンジェンタジャパン（本社・東京都中央区晴海、篠原聡明社長）は 11 月 7 日、同社の中央研究所（茨城県牛久市久野町）で秋の見学会を開催した。これまでも研究所の公開は行ってきたが、見学範囲を試験圃場にまで広げて開催するのは今年が初めてで、夏に続き今回が 2 回目の開催となる。同社では、世界 8 か所の主要研究所と各地の研究拠点が連携して研究・開発活動を行っており、牛久市の中央研究所では、日本の農業に適した農業の研究開発や野菜・花卉の新新種の商品化などに取り組んでいる。「業務内容を地域住民の方々に広く知ってもらうことが見学会の目的。全社的に取り組んでいるコミュニティー・エンゲイジメントの一環」（榎吉寿夫所長）。

見学会の受付で配られたリーフレットには、A から D 会場までの地図、そしてイベント案内が目玉を引く。A 会場のイベントは楽しい化学実験①ヒトにやさしい製剤の技術、②わかるしくみクロマトグラフィーのほか、作物の病原菌クイズ「菜園でよく見かける病気たち」、「クイズ！！秋の味覚、食べたの どの虫？」、B 会場「トマトの世界を見てみよう」、C 会場「え～こんなレタスやダイコンがあるの？」、遺伝子組換え作物の隔離圃場である D 会場では「食べるならどのとうもろこし」。クイズに答えて全問正解すると美味しい野菜のお土産がもらえる。子供から大人まで楽しく学べる盛りだくさんの内容となっていた。見学に訪れた初老のご夫妻が帰り際に残した、「近所にこんな研究所があるのを初めて知りました。日本の農業を支えるためにどんなことをやっているのかがよく分かりました」との言葉が印象的だった。



子供から大人まで、納得、満足